

令和 8 年度

広島市平和記念式典訪問団 レポート集



令和 8 年 8 月 6 日 長野県 駒ヶ根市

目 次

「戦争を“知る”」	赤穂中学校 3 年	五十嵐	結菜
「当たり前の日常が一番の幸せ」	赤穂中学校 3 年	砂場	彩蘭
「実際の苦しみを知って」	赤穂中学校 3 年	原	優
「知るべきこと」	赤穂中学校 3 年	清水	柚之介
「平和をつなぐ一歩」	赤穂中学校 3 年	宮下	結愛
「私たちがすべきこと」	東中学校 3 年	下平	樹生
「当たり前を感じられる日々に」	東中学校 3 年	湯澤	初峯
「助けられなかった命」	東中学校 3 年	下島	香那絵



令和 8 年度広島市平和記念式典訪問団の皆さん

「戦争を“知る”」

駒ヶ根市立赤穂中学校 3 年 ^{いがらし}五十嵐 ^{ゆいな}結菜

あなたは戦争についてどれほどの事を知っていますか？私自身、これまで歴史上の出来事としてしか捉えていませんでした。1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分。よく晴れた広島は一発の原子爆弾により一瞬にして破壊され、沢山の人が亡くなりました。終戦から 81 年がたった今年、私は広島平和記念資料館に行き、被爆者の方のお話を聞きました。実際の写真や絵、被爆者の方のお話を通して戦争が単なる歴史上の出来事ではないことがわかりました。被爆者の方のお話は授業や本で見た内容より鮮明で恐ろしいと感じるものでした。私はその残酷な話から戦争の実態や中身について、何も知らなかったのだと衝撃を受けました。ほとんどの人は私と同じように授業で出来事として戦争を学ぶことが多いと思います。ですがその出来事の中には、当時の人達の生き様や思いがたくさんあったと思います。それを知ってこそ戦争を知ったと言えるのではないのでしょうか。

資料の展示を見た際、同い年の方や私よりずっと小さいこどもの遺品や言葉が残されており、原爆の恐ろしさを目の当たりにしました。血のシミがボロボロになった服や崩れ変形した瓦礫は、原爆による酷い火傷や怪我、破壊力を想起させるものばかりで胸が痛みました。平和記念式典の会場である平和祈念公園は、当時建物疎開により空いた土地になったそうです。資料館に展示されていた被爆した児童の中には、建物疎開中に亡くなった方が大勢いました。一瞬で焼け野原と化した広島。今、私の立っているこの地で当時何人のこどもが苦しみ、彷徨ったのか。想像するだけで痛ましく悲惨なことです。それは原爆の恐ろしさを訴えかけるものであり、絶対に避けてはならない現実だと思いました。平和記念式典でこども代表の言葉に「目をそらさず、知ろうとすること。」「悲しい現実でも向き合うこと。」とありました。原子爆弾の投下を含めたこの悲惨な戦争に目を背けず、重い歴史を受け止め、未来のために平和を願い、考え続けることが今、私たちがなくてはならないことなのではないのでしょうか。

今回の体験で、被爆者の方のお話を聞いたり、実物を見ることで、原爆の恐ろしさや当時の状況をより知ることができました。戦争についてよく知らない人が多くなってきている中、唯一の被爆国である日本に生きる一人として、自ら積極的に戦争について学んでいくことが大切だと改めて感じました。私も今回の体験をもとに、より多くの人に戦争の事を伝え続け、私自身も“知り”続けたいと思います。今ある「平和」を確実に未来に繋げていくために。

「当たり前の日常が一番の幸せ。」

駒ヶ根市立赤穂中学校 3 年 ^{すなば}砂場 ^{あいり}彩蘭

私は「当たり前の日常が一番の幸せ。」という言葉が好きだ。今回広島へ行ったことで、これを繋ぐことについて考えた。

広島平和記念資料館で見た原爆の惨状は、あまりにも辛いものだった。大火傷を負った人、皮膚がたれ下がりゾンビのようになった人々。どれも一瞬にして起こった出来事だとは思えなかった。資料館には「魂の叫び」という展示ブースがある。そこには、その人が言った言葉、実際に持っていた物、着ていた服などが展示されていた。言葉は、家族の苦しみ、生きたいという人、戦争へ向かう人、いろんな立場での切実な思いが言葉として残され繋がれていた。私が心に残っているのは「お兄ちゃんはいいいねえ。」という言葉だ。これは、当時 14 歳の平田正子さんの言葉だ。正子さんは、原爆によって全身に大火傷を負った。そんな中、手首以外傷を負わなかった兄に対して言ったのだ。生きたいという気持ちと、大火傷の苦しみからでた素直で残酷なものだ。この言葉を言われた兄がどんな思いだったか。それは私の想像をはるかに越えるものだろう。この一言だけでも、原爆がうばったものが、どれだけ多くの大切、幸せだったのか考えさせられた。

式典では、被爆者の方、平和への祈りを、自らが、心からすることで、今まで多くの人が祈り繋いできた平和に感謝をし、繋いでいく番ということが、再確認できた。また、平和への誓いでは、「一人一人の小さな行動が、平和への後押しとなります。」という部分があった。私はそれを聞いたとき、自分がやるべきことが一つ、明確になった気がした。

私は、実際の惨状を見たとき、想像することが恐ろしくなった。それは、平和が当たり前の日常で過ごしているからだろう。この当たり前の平和は、多くの人が繋いできたものなのだ。私は、二度とあんな辛いことが行われないようにするのは、辛さを知らないからできない。だが、「当たり前が一番の幸せ。」ということを知っている私は、多くの人が幸せな日常を過ごすために、平和を繋ぐ。それが私の考えたことだ。

「実際の苦しみを知って」

駒ヶ根市立赤穂中学校 3 年 原 優^{はら ゆう}

これまで、学校の歴史の授業で戦争があったこと、広島と長崎に原爆が落とされたことを勉強してきました。そして戦争は二度と起こしてはいけないこと、自分は戦争に巻き込まれたくないとも、本気で考えるようになりました。しかし、そんな私自身は戦争についてどれだけ実際のことを知っているのか、そんな思いから今回参加を希望しました。

平和記念式典では、吹奏楽団の重々しい雰囲気演奏の中で、死没者名簿奉納や、献花が行われました。1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分、今から 81 年前のこの瞬間、私たちのいるこの広島に原爆が落とされました。

黙とうの時間はとても静かでした。誰かが秩序を乱すことなく、そこにいるすべての人が平和を願い黙とうができる、それが「平和」ということなのかもしれない、そう思いました。一方で、今この瞬間も世界のどこかでは戦争が起きていて、苦しんでいる人々がいることも事実です。何万人もの人の人生を奪っていった原爆、その核兵器を防衛のためと言って保有している国もあります。しかし、広島や長崎で実際に原爆が使われた歴史がある以上、これが「世界恒久平和」と言えるはずがありません。

式典が終わった後、慰霊碑に参拝するため列に並びました。待っている時間はとても暑かったです。テントで少しさえぎられていても、日差しは焼けるように痛かったです。原爆が投下された日も天気が良かったそうです。でも、投下の瞬間は私が感じていたものとは比べ物にならないほどの熱の中で被爆者の方々は焼かれていたのです。ものすごく苦しかったことでしょう。

平和記念資料館も見学しました。そこには想像以上の原爆の惨禍が展示されていました。投下の瞬間の地表は 3000 度以上にもなったそうです。その熱で多くの人が一瞬にして消え去りました。生き残った人も全身に大やけどを負いました。被爆体験者の方の講話も聴きました。その方のお父さんは全身大やけどを負いながら家に帰ってきましたが、声を聞くまでだれか分からなかったそうです。そして全身に蛆が湧いて数日後に亡くなったとおっしゃっていました。さらには放射線によって数年後に白血病を発症することも、多くの方が身体や心に苦しみを負い、一生背負い続けることになりました。

被爆者の方々がどれだけ苦しかったのか、今私たちが当時の苦しみを同じように想像することはできないと思います。ですが、だからこそ二度とその惨劇が繰り返されてはいけません。私たちができることは、どんな惨劇や苦しみがあったのかを知り、二度とその苦しみを味わうことのないよう伝え続けること、それがこれからの時代を生きていく私たちの責任だと思います。

献花をする参加者



広島平和記念資料館での様子



「知るべきこと」

駒ヶ根市立赤穂中学校 3 年 しみず 清水 ゆうのすけ 柚之介

自分が広島に行って、学び、気付いたことは、大きく分けて 3 つあります。それは、「今と昔の違い」「原爆が落とされたことによって、起きたこと」「今の自分たちがするべきこと」です。

広島平和記念資料館に行った時に、被爆者の方の講話を聞きました。そこで自分が思ったことは、今の時代は様々な場所で食べ物が売っていて、中学生は 15 歳まで義務教育の授業で満足に学問を学ぶことができます。自分の学びたい勉強ができる高校を受験できて、ほとんどの中学生が高校に進学することができます。ですが、当時の僕たちと同じ年代のこどもは、常に空腹で日本中で食料が不足していたこと。学校では、勉強はほとんどできず、高校への進学もほとんどありません。そんな今の時代では簡単にできていることが、ほとんどできない状況だということ。そして、そんな中、広島に原子爆が投下されました。近くいた人は一瞬で陰になり、大勢の人が、全身に火傷や怪我を負いました。火傷を負った人は、水を求めて助けを探していましたが、当時は火傷を負った人に水を飲ませたら、容態が悪化するという考え方が広く伝わっていて、水はなかなか与えられませんでした。原爆を落とされたことによって、悲しみ、不安を抱く人が大勢いました。また、被爆した多くの人が、原爆のせいで、なくなっていました。原爆が投下された後も、後遺症や原爆病という、原爆由来の病気などで苦しんだ人が大勢いました。そして、そんな原爆が落とされたのが 81 年前です。被爆者の最低年齢は 81 歳になります。もう 20 年後には、被爆者からの話を聞ける機会もなくなります。そしたら、人から広島の前爆について話を聞くことが少なくなっていって、だんだんと原爆の話が風化してしまいます。そうさせないためにも、自分たちの世代の人が、被爆者の話をしっかり聞いて、次の世代の人に伝えて、繋げていかなければならないと思いました。そして、歴史を学ぶ意味を考えてみました。自分が思う歴史を学ぶ意味は、「今」は昔の、「歴史」が積み重なってできたものであり、歴史を知ることで、今を知ることに関わり、より良い未来を作っていくためだと思いました。

「平和をつなぐ一歩」

駒ヶ根市立赤穂中学校 3 年 みやした 宮下 ゆめ 結愛

皆さんは「平和」について考えたことはありますか？私が広島平和記念式典に参加したと思った理由は、戦争や原爆について深く学び、授業やテレビだけでは分からない戦争、原爆の恐ろしさや悲惨さを自分自身で学びたいと思ったからです。そして、学んだことをこれからの未来へ伝えていきたいからです。

忘れられない日。1945 年 8 月 6 日、午前 8 時 15 分。広島の上空約 600 メートルでアメリカ軍によって一つの原子爆弾が投下されました。上空では数百万度、爆心地付近の地表面の温度は 3000 度から 4000 度の超高温に達していました。きれいでにぎやかだった町は一瞬の光の中に消えていき、骨と灰になり、大切なものを奪われました。広島平和記念資料館では、写真や被爆者の方が書いた絵、被爆者の遺品や被爆の惨状を見ってきました。写真には、原爆によって負ったやけどや、放射能によって皮膚にできた黒い斑点模様、黒く焦げたお弁当箱や熱線によってドロドロに溶けたビン、被爆者が身につけていた服やズボンがあり、それを見て私は 81 年前本当に起きたんだなと思いました。見てみると、怖さや恐ろしさが自分の体を襲ってきました。これが 81 年前のもので、私が想像していたことよりはるかに悲惨なものでした。なぜこんな戦争が起きてしまったのか。戦争がなければ、多くの人が死なずに済んだのになと思いました。

平和記念式典では平和への誓いで、広島県の小学生二人が「私たちには、広島のこととして、行動する責任があります。相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること」と言っていました。相手の気持ちを考えず、違いがあっても認めず、受け入れなければ争いごとが起こっていきます。私は、人の気持ちを考えて、受け入れることが大事だと感じました。

今でも戦争をしている国はあります。私は平和というものを考えた時、大事なのは、一人一人が他者を理解することだと思います。それは、日常生活でも同じです。だからこそ私は、争いごとがないように、他者を理解していきたいと思いました。そして、今の生活は本当に平和でありがたいことだと思います。

戦後 81 年が経ち、戦争を体験した人は少なくなっていますが、今では戦争についてのテレビや動画が見やすくなっています。それらを活用して「戦争の悲惨さ、戦争はあってはならない」と皆で共感できるようにすることが私に今できることです。一人一人のこの気持ちが、これからの人生や未来の平和につながると信じています。戦争のない世界になってほしい。これが一番の願いです。

「私たちがすべきこと」

駒ヶ根市立東中学校 3 年 ^{しもだいら} 下平 ^{きき} 樹生

8月6日、私は広島平和記念式典に参加しました。そこでは、目に見える命の尊さを学びました。残酷な事実を知りました。

式典中、小学6年生二人による「平和への誓い」が述べられました。真剣に平和について考え、その思いを強く多くの人々に伝えている姿がありました。中でも、「私たちには、被爆体験を直接聞くことができる最後の世代として、当時の記憶を事実として受け止める使命があります。」という言葉が印象に残っています。私たちの平和を思う姿勢や、関心を持ち、積極的に知ろうとする姿勢が、これから先、当時実際にあったことを風化させずに語り継いでいくために必要なものであると思います。

資料館には、当時の写真や衣服、建物の一部などがありました。教科書や本の中にあった、私がこれまで見てきたものとは比べ物にならない、リアルな形がそこにはありました。当時の残酷な記憶を見た時、より多くの若い世代の人に、原爆の規模の大きさ、人々にもたらした悲しみや苦しみを知ってもらうには、身近である教科書が一番だと思いました。しかし、それと同時に、どうして教科書には載っていないのか、その理由も分かった気がします。死の斑点と呼ばれる赤い点が顔中にできてしまった人、大火傷を負い、病院の前まで必死に歩いてきたのに治療を受けさせてもらえず、その場で亡くなってしまった人々、火傷によって全身の肌がピンク色になってしまった人、あまりにもひどすぎる、それが現実とは思えない、そんなものばかりでした。これが、原爆によってもたらされたものです。15年間生きてきて、少しは原爆に対する知識はあったと思います。ですが、それは本当にあったことのごくごく一部にすぎませんでした。

被爆者体験講話で被爆者の方は言っていました。「みんな原爆に殺された。私は生き残ったんだから、話さなきゃ。」家族や友達、たくさんの人々の大切な夢や希望、未来を奪った原爆のことを強く語っていました。また、原爆投下後、最も悲しく寂しかったことは、家に帰って「ただいま」と言っても「おかえり」がなかったことだそうです。いつもなら「おかえり」の後に、「お母さん、お父さんはどこ?」「まだ仕事だよ」という日常的な会話が続くはずなのに「おかえり」と言ってくれる人すらないのだから。という被爆者の方の言葉に胸が痛みました。81年前も今も、「ただいま」「おかえり」を交わす、何気ない日常は同じだったはずです。

私たちは、被爆体験を直接聴くことができる最後の世代です。未来へ、81年前に起こった事実を正しく、深く伝えていかなければいけません。そのために今できること、すべきことは知ることです。自分にできることを考え、行動すること、その連鎖が平和な世界へと近づいていくはずです。

被爆者の思い、願い、伝えたいことを背負って、私たちが次の世代へと語り継ぎます。

「当たり前を感じられる日々に」

駒ヶ根市立東中学校 3 年 ^{ゆざわ}湯澤 ^{はつね}初峯

広島に行った 2 日間で、私は改めて戦争の恐ろしさと、日々が平和であることの大切さを強く実感しました。

資料館には、被爆したことによって負傷した人々の写真や、変形した瓶、ぼろぼろになった衣服など、当時の被爆の様子が伝わる様々な展示物がありました。人々の当たり前がそこにあったこと、それを原子爆弾が一瞬にして壊したのだと感じました。見ているだけでも辛く、怖かったです。見ているだけでもこんなに恐怖を感じているのだから、実際に被爆された方々のことを考えると、私の語彙力では言葉にできません。こんなに怖いのなら、参加しなければよかったと、ほんの一瞬でも感じてしまいました。その時思い出した言葉があります。

「私たちには、被爆体験を直接聴くことができる最後の世代として、当時の記憶を事実として受け止める使命があります。目をそらさず、知ろうとすること。悲しい現実でも向き合うこと。そこには生きたかった人々、生き続けた人々の思いがあります。」この言葉は、広島平和記念式典でこども代表が言っていた言葉です。当時被爆された方々の辛い思いを無駄にせず、事実を知り、二度と同じ悲劇を繰り返さないために、私たちは生きていくべきだと気付かされました。

私は広島で見て感じたこの思いを忘れず、多くの人に平和について考えてもらいたいと思います。戦争のことに関わらず、今後も異なる考えをもつたくさんの人と出会い、交流をしていくのだと思います。そんなときには、お互いに考えを受け止め、話し合うことが大切だと思います。

私たちの過ごす日々に当たり前なんてありません。当たり前を感じられるということは、とても幸せで平和な日々を送れているということだと思います。今以上にもっと多くの人々が、少しでも当たり前を感じられる平和な日々を送れるような世界であるべきだと思います。一人ひとりの行動は小さな力であっても、それがたくさん集まれば、世界はきっと変えることができると思います。まずは原爆や戦争にまつわることを、そして今現在世界にはどんな課題があるかを知り、自分の考えをもち、多くの人と話し合うことで、平和な日々を作り上げていくことが大切だと思います。

「助けられなかった命」

駒ヶ根市立東中学校 3 年 ^{しもじま} 下島 ^{かなえ} 香那絵

広島を訪れ深く心に刻まれた言葉があります。それは、「助けてあげられなくてごめん」という言葉です平和記念資料館の中に展示されていました。その言葉を見た瞬間、鳥肌が立ちました。言った方の気持ちを何度も何度も考えました。もし、この言葉を親が子どもに向けて言っていたら、親はきっと助けてあげられず子どもへの罪悪感が沢山あったと思います。謝ることしかできず、絞り出して最後に言った言葉かもしれません。そのようなことを考えてみるととても胸が苦しくなりました。平和記念資料館を訪れ、原爆によって身体だけではなく、心に深い傷を負った方々がいたのだと学びました。原爆の恐ろしさや、悲惨さを実際の資料や言葉を通して、より深く受け止めることができました。

次に被爆者体験講話を聞きました。原爆投下により、ひどい火傷を負ったり、放射線による後遺症で亡くなってしまった方々のことは知っていましたが、その一方で、目の前にいる人を助けたくても助けられなかった人々がいたことは知りませんでした。講話でも「助けてあげられなくてごめん」という言葉を講師の方が紹介してくださいました。沢山の重い瓦礫の中から助けることができず、走り去っていく画像とともに紹介してくださいました。瓦礫の中から手を伸ばし、苦しんでいる人。すぐそばに生きている命があるのににもかかわらず助けられない人。とても胸が苦しくなる場面でした。

平和記念資料館と被爆者体験講話、どちらも同じ言葉でその背景にはただ助けてあげたかったという変わらない気持ちがありました。「助けてあげられなくてごめん」この言葉には原爆の悲惨さだけではなく、目の前の人を助けてあげられなかった人の悲しみや苦しみが詰まっていました。

遠い広島まで行き、平和について学習をしてきた私たちには沢山のすべきことがあると分かりました。原爆を経験した方が居なくなってしまう今、今回学習したこと、感じたこと、考えたことを様々な方へ伝えていくことが今私にできる平和への一歩だと実感しました。世界中から核兵器をなくすことは、一人の力だけでは難しいかもしれません。しかし、今回の私たちのように平和について学習することができれば、何か気持ちが変わるかもしれません。「助けてあげられなくてごめん」を言わない世界に。

平和への誓い

もしも「大切なもの」が一瞬で消えてしまったら、どんな気持ちになるのでしょうか。
私たちが笑いあっているときにも、尊い命が失われている現状があります。
今もどこかで、当たり前前の日常が奪われています。

ぼろぼろになった制服。

黒く焦げたお弁当箱。

それは、当たり前前の毎日を生きていた証です。

昭和 20 年（1945 年）8 月 6 日、午前 8 時 15 分。

たった一発の原子爆弾が、人々の暮らしを、人生を地獄に変えました。

髪は焼けぢぢれ、全身の火ぶくれが破れ、火傷した皮膚が垂れ下がった人々。

「痛いよ。苦しいよ。」

「助けて、お母さん。」

「死にたくない。」

「助けてあげられなくてごめん。」

死んでしまうつらさ、生き続ける苦しみは、想像することさえ恐ろしいことです。

私たちには、被爆体験を直接聴くことができる最後の世代として、

当時の記憶を事実として受け止める使命があります。

目をそらさず、知ろうとすること。

悲しい現実でも向き合うこと。

そこには、「生きたかった人々」、「生き続けた人々」の思いがあります。

私たちには、広島のかどもとして、行動する責任があります。

相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること。

平和への思いを、自分なりの方法で表現すること。

一人一人の小さな行動が、平和への後押しとなります。

平和とは、誰かからあたえられるものではなく、世界中の人々で創り上げるものです。

かどもである私たちも、その一員として平和への一歩を踏み出します。

かけがえのない「大切なもの」を、確かな希望を、未来へ届けるために。

令和 8 年（2026 年）8 月 6 日

かども代表

広島市立高須小学校 6 年 柿崎 由宇

広島市立高南小学校 6 年 河野 和希

広島市平和記念式典訪問団レポート

発行 令和 8 年 9 月

企画編集 駒ヶ根市 総務部 総務課

長野県駒ヶ根市赤須町 2 0 番 1 号

電話 0 2 6 5 - 8 3 - 2 1 1 1 (代表)